



Title	グリーン・ツーリズムにおける農家キャンプの成立条件：北海道のSキャンプを事例とした供給側からみた分析
Author(s)	中山, 紗央里; 増田, 清敬; 澤内, 大輔; 山本, 康貴; 出村, 克彦
Citation	北海道農業経済研究, 14(2), 84-89
Issue Date	2009-02-27
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/63674">http://hdl.handle.net/2115/63674</a>
Type	article
File Information	KJ00006717985.pdf



[Instructions for use](#)

# グリーン・ツーリズムにおける農家キャンプの成立条件 －北海道のSキャンプを事例とした供給側からみた分析－

中山 紗央里・増田 清敬\*・澤内 大輔\*\*  
山本 康貴・出村 克彦

## I. はじめに

近年、わが国政府は活力に満ちた地域社会実現の観点などから、観光（ツーリズム）を推進している（国土交通省 [2]）。特に、環境保全への関心の高まりや観光ニーズの多様化から、エコ・ツーリズム<sup>注1)</sup>などの自然志向的なツーリズムに注目が集まっている。自然環境をツーリズムのために利用する場合、観光客が排出するゴミ問題などによる自然環境の悪化も懸念される。それゆえ、自然環境の保全に配慮したツーリズムを展開していくことが、今や、強く求められているといえよう。

自然環境を利用したツーリズムの1つとして、「自然の中での一時的な生活」（日本キャンプ協会 [4]）と定義される「キャンプ」がある。また、「農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」（農林水産省 [5]）と定義されるグリーン・ツーリズムも、自然との関わりが深いツーリズムである。最近、北海道において、キャンプを農場内で実施するという「農家キャンプ」の取り組みが開始された。

農家キャンプは、欧州などでみられるキャンプ形態であり、農場内の一角をキャンプ用地として貸付けるというものである<sup>注2)</sup>。また、農村地域における宿泊施設である農家キャンプは、グリー

ン・ツーリズム宿泊施設の一形態としても位置付けられる。

わが国における農家キャンプの既存研究については、海外の事例紹介（宮崎 [3]、山崎・小山・大島 [6]）に留まっているのが現状である。特に、わが国で実施されている農家キャンプの事例について、本格的な分析を試みた研究を、筆者らは見出すことはできなかった<sup>注3)</sup>。ただし、グリーン・ツーリズム宿泊施設に関する既存研究として、経営者の意識調査をもとに、供給側の視点から、ファームインに関する分析を行った吉田・樋口 [7]がある。

本研究の課題は、吉田・樋口 [7]と同様に、ファームインと同じくグリーン・ツーリズム宿泊施設の一形態である農家キャンプについて、供給側の視点から、その成立条件を検討することにある。分析事例は、2005年から北海道において取り組みの始まった農家キャンプ（以下Sキャンプ）である<sup>注4)</sup>。具体的には、以下の3点について、Sキャンプ実施農家および関係各機関に対する聞き取り調査結果から分析を試みる。

第1に、農家の初期投資に関する点である。初期投資額が小さいほど、Sキャンプ開設は容易になると推察される。このため、いかにして初期投資を抑制するかがポイントとなる。

第2に、農家の労働負担に関する点である。Sキャンプ開設に伴う農家の追加的な労働負担増加

北海道大学

\*滋賀県立大学

\*\*日本学術振興会特別研究員（北海道大学）

は、S キャンプの実施・継続を困難にする大きな要因と推察される。このため、いかにして追加的な労働負担増加を軽減するかがポイントとなる。

第3に、農家の意向に関する点である。農家が今後ともS キャンプを継続して行きたいという明確な意向を有していることは、いうまでもなく、S キャンプが今後とも継続し発展していく上で、重要なポイントとなる。

注1) エコ・ツーリズムとは「自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のありかた」と定義される（エコツーリズム推進会議 [1]）。

注2) グリーン・ツーリズムは、農林水産省 [5] の定義によると担い手として農林漁家を想定しており、農家キャンプの担い手としても農林漁家が想定される。本研究でいう農家には、林家も含むものとする。

注3) 農山漁村部にあり、グリーン・ツーリズム振興に寄与するオートキャンプ場に関する研究として吉田ら [8] があるが、この場合のオートキャンプ場は農場内で行う農家キャンプを想定していない。

注4) S キャンプとは、北海道における農家キャンプ事業の正式名称についてイニシャル表記したものである。なお、S キャンプの特徴については次節で言及する。

## II. S キャンプの取り組み実態

### 1. S キャンプの概要

#### 1) 取り組み経緯

S キャンプはグリーン・ツーリズム関連のNPO 法人であるA 協会が、新たなグリーン・ツーリズム実践者と客の獲得へ向けて発案したものである。背景には、グリーン・ツーリズムの知名度の

低さと、マンネリ化している現状を打開したいというA 協会の考えがある。また、A 協会はアウトドア用品メーカーと提携することで、メーカーの知名度を活かしてキャンプを運営したいと考え、提携先を募った結果、B 社と合意した。2004年6月から両者でS キャンプの運営に関する協議が始まり、その後、2005年10月に農家C (X 町) と農家E (Z 町) の2戸でS キャンプを試験的にオープンさせた。2006年6月からは農家D (Y 町) も加えた全3戸で本格的にオープンしている。

### 2) 実施農家の選定と事前準備

S キャンプ実施農家は、景観が良い、荒天時の避難場所としてコテージを所有している、地元の食材を提供できるなどの条件を満たす農家の中からA 協会が選んでいる。S キャンプ開設を受諾した農家は、S キャンプ開設に向け、トイレ、炊事場・洗面所などの水場を整備する、景観を損なわないよう農場内を整備する、レンタル用キャンプ用品を準備するため、キャンプ用品を1セット購入するといった準備をする。

### 3) 特徴

S キャンプの特徴は表1のように整理される。一般のキャンプ場と比較したS キャンプの特徴は客数を1日2組に限定していることである。これには、S キャンプ客に静かにゆったりとキャンプを楽しんで欲しいというA 協会とB 社の意図がある。反面、キャンプ料金が大人1人1泊1,500

表1 S キャンプの特徴

少数組限定 (1日2組まで)
農場内でのキャンプ
景観が牧場やシラカバ樹林
各種体験メニューがある
地元の食材を用意
アウトドア用品メーカーが運営に関わっている
期間限定営業 (6月~10月)
一般のキャンプ場より高料金 (大人1人1泊1500円)

資料) 聞き取り調査 (2006年7月、12月) より作成。

表2 Sキャンプ実施農家の概要(2006年)

	農家C (X町)	農家D (Y町)	農家E (Z町)
農林業経営	酪農	酪農	林業
経営規模	採草地36ha 飼料畑7.7ha 経産牛70頭 育成牛50頭	採草地40ha 放牧地20ha 経産牛60頭 育成牛30頭	林地7ha 露地野菜30a 採草地2ha
生産量	生乳632 t/年	生乳275 t/年	樹液10 t/年
家族労働力 (主に扱う部門)	経営主(酪農・農業体験) 妻(酪農・農家民宿・ 農家キャンプ) 娘(酪農・農業体験)	経営主(酪農) 妻(酪農) 兄(酪農) 父(酪農・農家民宿・ 農業体験・農家キャンプ) 母(酪農・農家民宿・ 農業体験・農家キャンプ)	経営主 (林業・農家民宿・ 農業体験・農家キャンプ) 妻(農家民宿・農業体験・ 農家キャンプ)
雇用 (主に扱う部門)	常用雇用4人 (酪農・農業体験)	0人	0人
農家民宿			
開始年	1998年	B & B 2002年 農家民宿2004年	1997年
宿泊施設	コテージ2棟	経営主両親宅2階	コテージ2棟 センターハウス1棟
宿泊定員	12名	5名	20名
年間客数	250人	200人	400人
農業体験			
開始年	1996年	2002年	2001年
メニュー	牧場見学 牧場見学と搾乳体験 トラクター試乗体験 など	乗馬体験 ポニーの引き馬 など	薪のサウナ 五右衛門風呂 いちごの摘み取り など
年間客数	2400人	90人	56人

資料)聞き取り調査(2006年7月、12月)より作成。

円と、Sキャンプと同程度のキャンプ場施設を整えた一般のキャンプ場料金に比べ、高めに設定されている。

## 2. Sキャンプ実施農家の概況

### 1) 実施農家の概要

表2はSキャンプ実施農家の概要である。Sキャンプを実施している農家は、2戸が酪農、1戸が

林業を営んでいる。3戸とも共通して、キャンプ開始以前から農家民宿や農業体験といったグリーン・ツーリズムに取り組んでいる。

表3はSキャンプの概況である。農家Cと農家Eは2005年からSキャンプ客の受け入れを始めた。2006年には農家Dも加えた3戸で合計34組97名のSキャンプ客を受け入れている。

表3 Sキャンプの概況

	農家C (X町)	農家D (Y町)	農家E (Z町)
開始年	2005年	2006年	2005年
テント設置場所	牧場施設用地内の芝生	牧草地(採草地・牛を放していない放牧地)	シラカバ樹林
キャンプ場面積	0.33ha	60ha	4ha
年間来客数(2005年)	2組2名	—	2組6名
(2006年)	16組50名	3組9名	15組38名
料金			
キャンプ場使用料		1人1泊大人1500円/小学生以下1300円	
食材料金		1人1500円(2名から受付)	
営業期間		6月～10月	

資料)聞き取り調査(2006年7月、12月)より作成。

注1) キャンプ場面積とは、テント設置可能な場所の面積の合計。

2) 農家Dは、2005年度はキャンプ場を開設していない。

## 2) 取り組み開始前の実施農家の考え方

実施農家がSキャンプを始めた動機は、A協会からSキャンプを開業してみないかと誘われたことや、農業体験用に整備したトイレ・炊事場などの施設を活用しようと考えたことなどであった。

また、取り組みを開始する前の実施農家におけるSキャンプの位置付けは、農家C、農家Eでは、既存のグリーン・ツーリズムの取り組みを補完するものとなっていた。これはSキャンプ利用料収入が小さいと見込まれるため、Sキャンプ客による農業体験収入を期待する、ということである。農家Dでは農家民宿と同様、グリーン・ツーリズム宿泊施設の一形態となっていた。

Sキャンプを始める前の懸念事項は、Sキャンプ客が騒ぐなどして近隣の農家や他の宿泊客に迷惑をかけないか、農地に油などを捨てたりするなど環境悪化を招かないかといった、客のマナーに関するものであった。

## Ⅲ. 供給側からみたSキャンプの成立条件

### 1. Sキャンプ実施農家の初期投資

表4はSキャンプ実施農家の初期投資である。農家C、農家Dをみると、トイレ・炊事場などがキャンプ開始以前から、農業体験や農家民宿などの別用途のために整備済みとなっている。そのため、Sキャンプのための新たな投資が少なくなっていることがわかる。農家Eをみると、

他の2戸と比べてSキャンプのための新たな投資が大きくなっている。農家Eでは、Sキャンプを開始する当初、Sキャンプ客にはコテージの中にあるトイレを使用してもらう予定であった。しかし、野外で活動するSキャンプ客に、屋内のトイレをコテージの客と共同で使用してもらうのは不便だろう、と経営主が考え、新たに屋外トイレを設置したため、投資額が大きくなっている。とはいえ、既に整備済みであった炊事場兼洗面所を利用することによって、施設が何も整備されていない状況からSキャンプを始める場合よりも、投資額は低く抑えられているといえよう。

以上から、実施農家は農家民宿や農業体験のための既存施設を活用することで初期投資額を抑制していたことが示された<sup>注5)</sup>。

### 2. Sキャンプ実施農家の労働負担

Sキャンプの運営体制は図1のようになっている。まず、A協会とB社が共同でSキャンプの

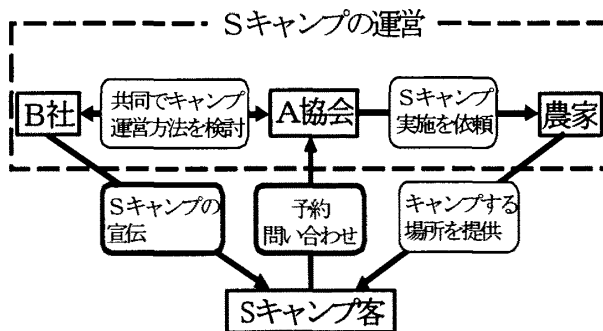


図1 Sキャンプの運営体制

資料) 聞き取り調査(2006年7月、12月)より作成。

表4 Sキャンプ実施農家の初期投資

	農家C (X町)	農家D (Y町)	農家E (Z町)
農家キャンプで使用する施設で別用途のために整備済みであったもの	トイレ・炊事場兼洗面所 (合わせて500万円)	トイレ (70万円)	炊事場兼洗面所 (25万円)
農家キャンプへの新たな投資	29.2万円	18万円	95万円
投資内訳	キャンプ用具 (15万円) 野外用料理器具 (3.6万円) 薪保管場所の修繕費 (10万円) バーベキュー用コンロ材料 (0.6万円)	キャンプ用具 (15万円) テント式トイレ (3万円)	キャンプ用具 (15万円) トイレ (35万円) 乗用草刈機 (40万円) 肩掛け草刈機 (5万円)

資料) 聞き取り調査(2006年7月、12月)より作成。

運営方法を検討し、農家にSキャンプ実施を依頼する。次に、B社は顧客に対してSキャンプを宣伝し、顧客はA協会に対して、キャンプの予約、問い合わせをする。予約が入るとA協会は農家に知らせ、農家はキャンプ客を受け入れる、という流れになっている。つまり、A協会がSキャンプの予約や問い合わせについて対応し、B社が宣伝を担当、実施農家はSキャンプ客へのキャンプ場の提供と現場での対応という役割分担がなされている。それゆえ、Sキャンプの受付対応や宣伝に関する実施農家の労働負担増加は、A協会やB社によって軽減されていると考えられる。

以上から、このような役割分担がSキャンプ開設に伴う実施農家の追加的な労働負担増加を軽減させる方策として取られていることが示された<sup>注6)</sup>。

### 3. Sキャンプ実施農家の評価と今後の意向

2006年のSキャンプ受け入れを終えた後のSキャンプに対する実施農家の評価は、A協会が予約受付などの対応をしてくれるのでSキャンプ客を受け入れる負担が小さい、農家民宿と異なりベッドメイクや掃除の必要がない、夏の繁忙期に農家民宿が満室になった時など代わりの宿泊施設として使用できる<sup>注7)</sup>、Sキャンプ客のマナーが良い<sup>注8)</sup>、などの評価が多かった。反面、キャンプサイト管理や食材準備の負担<sup>注9)</sup>が大きい、Sキャンプ客の農業体験利用が少ない<sup>注10)</sup>などの評価もあった。

今後の展開として、農家Dは、労働面や精神面で負担にならない程度にグリーン・ツーリズムに取り組んでいきたいと考えているため、受け入れ組数は現状維持を考えていた。一方、他の2戸は、Sキャンプ客の農業体験利用からの収入増を見込んでいたが、実際に農業体験をする人は少なく、今後は、受け入れ組数を少し増やす<sup>注11)</sup>ことで収入を増やし、投資分の早期回収をはかりたい

と考えていた。

以上から、実施農家は今後もSキャンプを継続していきたいという明確な意向を有していることが示された。

注5) トイレを保有しない場合、どのように農家キャンプを始めれば良いのかなどの論点については、事例が絡についたばかりで、まだ情報が不足しており、今後の解明が必要である。

注6) より詳細な労働実態の解明も今後の課題である。

注7) Sキャンプは農家民宿が満室になった場合の代替宿泊施設、あるいは、農家民宿同様、グリーン・ツーリズム宿泊施設の一形態と位置付けられていた。

注8) 本研究の調査時点において、Sキャンプは、B社のウェブサイト上でのみ宣伝されているため、Sキャンプ客は、B社の顧客にはほぼ限定される。B社の顧客は、キャンプ経験の豊富なキャンプ上級者が多いことで知られている。このため、今回調査したSキャンプでは、マナーの良い客が多くなっているものと推察される。

注9) Sキャンプでは「地元食材の提供」を実施農家がSキャンプ客に提供するメニューの1つにしている。このため、「地元食材の提供」のための食材の買出しなどは、Sキャンプ客を受け入れる実施農家側が行うことになる。

注10) Sキャンプ客の半数以上は周辺観光にも出かけていたことなどが、農業体験利用が少なかった一因と推察される。

注11) 農家C、農家Eは、Sキャンプ客の受け入れ組数を現在の1日2組から3～5組程度に増やしたいと考えていた。

## IV. むすび

本研究の課題は、供給側の視点に立脚し、農家キャンプの成立条件について検討することにあつた。分析事例は2005年から北海道において取り組みの始まった農家キャンプ(Sキャンプ)とし、Sキャンプ実施農家および関係各機関に対する聞き取り調査を行った。

分析の結果、次の3点が明らかとなった。

- ① Sキャンプ実施農家は、農家民宿や農業体験のための既存施設を活用することで、Sキャンプ開始に必要とされる初期投資額を抑制していた。
- ② Sキャンプに関わる受付対応や宣伝に要する実施農家の追加的な労働負担増加は、関係各機関がそれら業務を代行することで抑制されていた。
- ③ Sキャンプ実施農家は、Sキャンプを今後も継続して行く明確な意向を有していた。

以上から、Sキャンプは、「既存施設を活用することで初期投資額が抑制され」「実施農家の追加的な労働負担増加を軽減させる方策がなされ」「実施農家が今後もSキャンプを継続する明確な意向を有していた」ことが、その成立条件として重要である点が示唆された。

本研究は、まだ緒についたばかりの農家キャンプの成立条件を本格的に検討して行く上でのいわば「第1次接近」の分析に留まっている。このため、農家キャンプの成立条件について、より一般化された結論を導くには、以下に述べる論点を更に解明して行く必要がある。第1に、まだ緒についたばかりの事例で実績データなどが乏しく、供給側の視点からみて重要な農家キャンプの収益性が分析されていない点である。第2に、需要側の視点が、まだ分析されていない点である。いうま

でもなく、農家キャンプの成立条件は、農家キャンプ客のニーズや属性などの需要側の視点と供給側の視点からの両面から分析した上で、最終的に総合判断されるべきものである。

## 引用文献

- [1] エコツーリズム推進会議「エコツーリズム推進マニュアル」, [online] available at ([http://www.env.go.jp/nature/ecotourism/manual/chpt\\_mat.pdf](http://www.env.go.jp/nature/ecotourism/manual/chpt_mat.pdf)), アクセス日 2007年2月23日.
- [2] 国土交通省「観光立国推進基本法の概要」, [online] available at ([http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/kanko/pdf/kihonhou\\_gaiyou.pdf](http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/kanko/pdf/kihonhou_gaiyou.pdf)), アクセス日 2007年2月23日.
- [3] 宮崎 猛「グリーン・ツーリズムの発想」『農林統計調査』第42巻第11号, 1992, pp.19~21.
- [4] 日本キャンプ協会「日本キャンプ協会ホームページ」, [online] available at (<http://www.camping.or.jp/>), アクセス日 2007年2月23日.
- [5] 農林水産省「グリーン・ツーリズムの展開方向」, [online] available at ([http://www.maff.go.jp/nouson/chiiki/gt/3gtsonota\\_tenkaihoko.pdf](http://www.maff.go.jp/nouson/chiiki/gt/3gtsonota_tenkaihoko.pdf)), アクセス日 2007年2月23日.
- [6] 山崎光博・小山善彦・大島順子『グリーン・ツーリズム』, 家の光協会, 1993.
- [7] 吉田謙太郎・樋口めぐみ「ファームイン全国調査によるグリーン・ツーリズムの計量分析」『農業総合研究』第53巻3号, 1999, pp.45~97.
- [8] 吉田 茂・福仲 憲・大城安弘・轟 孝「農業・農村の活性化に関する一考察-オートキャンプ場導入による活性化-」『農業経済論集』第48巻第1号, 1997, pp.127~138.